

このコーナーでは、水資源機構の環境保全の取り組みを紹介します。

思川開発建設所

多様な動植物の生息・生育環境の創出

思川開発建設所（栃木県鹿沼市）では、多様な動植物の生息・生育環境を最大限守るための取組の一つとして湿地環境を有する環境保全地を平成二十一年度から整備してきました。

この環境保全地の整備にあたっては池、湿地、草地、広葉樹林及び残存する周辺山林の各要素が連続的なつながりを持つ環境を目標として整備し、整備後は、極力、人の手を加えずに、動植物の進入、定着利用などの自然の成り行きに委ねることにしました。

動植物の利用、定着状況について

環境保全地の動植物の利用、定着状況等については、平成二十四年度からモニタリング調査を開始し、継続した調査を行っています。

植物の定着状況については、湿地造成前は百種に満たなかった種数が、造成三年後には二百五十種以上にまで増加しました。

動物種に関しては概ね全ての種で増加傾向が確認されています。水生昆虫ではコオイムシやクロゲンゴロウ、止水環境を好むトンボなど、これまでに南摩ダム貯水予定区域周辺で確認されていなかった種が目立ちます。

両生類ではニホンアカガエルやヤマアカガエル等の卵塊から幼体、成体まで生息が確認されており、繁殖や生息場を使用されていることがわかります。また、それらの両生類を餌とする爬虫類や、ノスリやフクロウといった猛禽類も同様に観察され、あらゆる生き物たちに利用されていました。

環境学習会の場として

環境保全地の整備方針の一つが「地域の方々が、親しみをもって接し続けられる環境であること」としています。

この一環として、三年に一度の頻度で、地域の小学校の生徒さんたちに環境学習の場として活用していただいています。平成二十八年度の学習会では二十二名の生徒さんたちが参加し、講師の教えのもと池の周辺で昆虫採集や、水生昆虫類の採集が行われました。生徒さんたちは採集した昆虫類や周辺の植物を観察し、自然のしくみや重要性を学びました。今後さらに学習会の場や生物観察の場として活用していきたいと思えます。

環境保全地のこれから

これまでの調査結果から環境保全地は目標である「多様な動植物の生息・生育環境の創出」に向けて順調に推移していると考えられます。引き続き、動植物の利用状況等に関して調査を行うべくともに、南摩ダム完成後の環境保全地の活用計画についても検討していきます。



地域の小学校環境学習会



ヤマアカガエル



アオイトトンボ